

パスカルの《アポロジー》の プラン復元に関して(XVⅢ)

Sur le plan de l'《Apologie》 de Pascal (XVIII)

竹 下 春 日

I 類似の表現を有する諸断章について

本論において取り扱わんとすることは、類似の表現ないし類似の叙述を有する諸断章の分類配置の問題、特に配置さるべき fr. の数量の問題である。(i)——われわれは先づ、「類似」なる語の規定——われわれ自身による独自の視定を、掲示しておく。「類似」とは、語句そのものの客観的一致(概略的なる)を意味するのではなく、むしろ印象の一致——「読者に対して、叙述ないし表現が大略同じであるという印象を与える」という意味における一致を、意味するのである。

(ii)——次に、類似を示す表現、叙述なるものは、特色のある目立つものである、ということである(例えば《考える葦》の二断章——La. 217-Br. 348, La. 391-Br. 347)。(iii)——さらに、類似する叙述のみから成る断章、ならびに類似する叙述を一部として含む断章を、われわれは便宜上仮りに「類似(の)断章」と呼称する。したがって短断章と、これに類似の叙述ないし表現を含む長断章をも、われわれは斯く呼ぶのである。

扱てパスカルは、彼の《アポロジー》のプランにおける章中に、上記のごとき類似断章群を配置しているが、実際上は同一章中に配属せしめた場合と、異った章中に配分した場合との二つの場合が存する(因みに、類似断章の数は一

組2～3個で、これ以上ではない)。いったいパスカルは、どちらの場合を、より多く採用したであろうか。表現に多くの配慮を用いた彼が、両者の場合を無秩序かつ恣意的に作り出したとは、考えられない。一般的に言って、類似の表現を同一章中に反復することは、文章の変化を乏しくするものであり、レトリックの上から見て好ましいことではない。それゆえパスカルは、類似の諸断章を、異った章中により多く配分したであろうことが、先づ想像されるのである。彼が《アポロジ》において、その叙述に変化を与えようとしたことは、文体ないし叙述様式の多様化および章名中における略語使用等となって現われており、これらは既にわれわれの論じたところである(拙論XI回, IV, ハ参照)。

扱て他方、類似の表現を反復使用することは、上記のごとき欠点のみを有するに過ぎないものでは、決してない。これには、有効な面も存する。すなわち、論旨を強調するに役立つのみでなく、異った文脈中に使うことによって、意味ないしニュアンスを多少とも変化せしめることが、諸者に深い印象をもたらす場合もありうることは、事実である。したがってこの場合は、類似の表現を繰り近えすべきものと、言いうるであろう。事実パスカルは、かかる場合をも、十分認識していたのである——《Ceux qui ont l'esprit de discernement savent combien il y a de différence entre deux mots semblables, selon les lieux et les circonstances qui les accompagnent.》⁽¹⁾ 而してかかる事が、パスカルの『パンセ』中に、類似の fr. が少なからず見られる理由と、考えられる。

以上パスカルの修辞学的見地に立つとき、類似の叙述ないし表現を反復すべき場合と、逆に反復を避けるべき場合との二種が存在して、類似断章を同一章中に配すか否かの選択決定も、かかる二つの場合と絡み合って、事態は複雑である。而してその際、同一章中に配置された類似断章群と、異った章中に配分された類似断章群との何れが、数において勝っておるかは、極めて興味あるところである。ともあれ、パスカルが思い付くままに、無計画に、類似の諸断章を執筆しかつ分類配置したのでないことは、彼が『パンセ』の原稿に数多くの手を加えている事実、また叙述内容はもとより、その表現形式、その《順序》

ordre に並々ならぬ配慮を用いた彼の心遣いに徴して、疑い得ぬところである。

次にわれわれは、24° 《預言》の章中（章番号は Lafuma による。以下同様）に、次の一断章を見出す——《ダビデの血統の永久の統治、『歴代志下』。あらゆる預言により、しかも誓約をもって。しかるに、それは現世的には成就しなかった。『エレミヤ書』33章20節。》（La. 639-Br. 718）扱て Non classé 中の La. 643-Br. 717は、以下のものである——《預言。——ダビデには後継者が絶えないであろうという誓約。『エレミヤ書』》 後者の断章は、《預言》 prophéties. なる小見出しを有する点から見て、24° 《預言》の章に予定されていたことは、明らかである。したがって、上掲の二断章は類似のものとして、同一章中に所属することになる。しかし実際は、後者の fr. (La. 643) は、パスカル自身の手によって抹消されているのである。これは Non classé の執筆の時期において、類似物の反復の効果・逆効果を、彼が計算した結果と見做しうる例である。かような文章技術上の計算は、同時期別の断章についても行われたのであり、Classé 中の一断章 (La. 124-Ba. 73) 中の類似の語句を抹消して、Non classé 中のもの (La. 40-Br. 74) の一部に移したという事実を、われわれは既に知っているのである (XI回, IV, 五参照)。

一般に著作家の修辞学的配慮が、著作完成に向っての時間的進行に連れて、下書の完成度を高めてゆくという傾向は、極めは自然な成行であり、パスカルの場合も、初期の Classé の段階より Non classé 執筆の時期（後期）に到って、分類断章一般に対する修辞学的配慮の一環として、類似断章に対する修正およびその配置に、彼はその意を注いだものと見られる。それゆえ類似断章群の同一章中ないし異なる章中への配置とその数量とは、パスカルの美意識および読者への配慮によって、自から規定されていたのである。また類似断章群と非類似断章群との関連、ならびに類似断章群中の内部の区別——同一章中のものと異った章中に配分されるもの——これらすべては、相互に連関しつつ、量的に無規定無秩序ではなく、数的に必然性、限定性を持ってものと、推定しうるものであり、上述の類似断章群が、一組3個以上ではないという数的限定の事実も、以上の事を裏書きするものに外ならないのである。

II 類似断章の分類と表

パスカルの《アポロジ》にかんする断章群執筆の時期は、二期に分れる。Classé (既分類断章群) の時期と Non classé (未分類断章群) の時期とである。大体において、前者が時間的に先立ち (前期)、後者が後期に属することは、周知の事実である。われわれは、この前期 (Classé)・後期 (Non classé) における類似断章の数量的変化を把え、Non classé 所属の類似断章の内的分類の研究に資することにし度い。

表 I

《Classé に所属するもの》

a. <同一章中のもの>

- (1) La. 57-Br. 297 (2°), La. 88-Br. 154, 293 (2°). [カッコ中の章番号は Delmas 版による]
- (2) La. 117-Br. 174 (3°), Éd. du Seuil, La. 74 (3°).
- (3) La. 266-Br. 169 (8°), La. 267-Br. 168 (8°).
- (4) La. 332-Br. 190 (12°), La. 338-Br. 189 (12°).
- (5) La. 497-Br. 696 (19°), La. 500-Br. 719 (19°).
- (6) La. 489-Br. 758 (19°), La. 506-Br. 687 (19°).
- (7) La. 614-Br. 773 (24°), La. 636-Br. 727 bis (24°).
- (8) La. 684-Br. 474 (26°), La. 687-Br. 473 (26°).

計 (8組16個)

b. <異った章中のもの>

- (1) La. 221-Br. 409 (6°), La. 52-Br. 410 (2°).
- (2) La. 69-Br. 317 bis (2°), La. 170-Br. 317 (5°).
- (3) La. 76-Br. 141 (2°), La. 270-Br. 142 (8°).
- (4) La. 118-Br. 165 bis (3°), La. 391-Br. 347 (15°).
- (5) La. 217-Br. 343 (6°), La. 437-Br. 430 bis (18°).
- (6) La. 309-Br. 430 (11°), La. 437-Br. 430 bis (18°).
- (7) La. 335-Br. 204 (12°), La. 570-Br. 204 bis (22°).
- (8) La. 497-Br. 686 (19°), La. 591-Br. 639 (23°).
- (9) La. 545-Br. 609 (21°), La. 682-Br. 747 ter (26°).
- (10) La. 584-Br. 701 (23°), La. 574-Br. 702 (22°).

(10組20個)

上表に示されるごとく、相互に類似のものであって、同一章中に分類されている断章数は8組16個、異った章中に配置された断章数は、10組20個である。前述したごとく、同一章中に同一表現ないし類似の表現を反復することは、表現技術上好ましいことではない。この場合は、類似断章は異った章中に配置されたと、見られる。しかし他方、パスカルはこれを承知の上で、同一章中において類似の表現を、少からず用いている。両者の場合を比較すると、異った章中に配置された類似断章の方が、同一章中のそれらより4個多い。これが、Classéの時期(前期)における、類似断章群の内部事情である。

われわれは次に、後期(Non classé 執筆の時期)における類似断章群の表を掲げよう。

表 II

《Classé と Non classé に属するもの》

- (1) La. 65-Br. 436 (2°), La. 97-Br. 436 bis (N.c.).

- (2) La. 67-Br. 320 (2°), La. 208-Br. 320 bis (N.c.).
- (3) La. 73-Br. 164 (2°), 128-Br. 171 (N.c.), La. 160-Br. 131 (N.c.).
- (4) La. 83-Br. 162 (2°), La. 90-Br. 162 (N.c.).
- (5) [La. 117-Br. 174 (3°), Éd. du Seuil, La. 74 (3°)], La. 126-Br. 174 (N.c.).
- (6) La. 118-Br. 165 bis (3°), La. 156-Br. 165 (N.c.).
- (7) La. 119-Br. 405 (3°), La. 131-Br. 406 (N.c.).
- (8) La. 184-Br. 313 (5°), La. 208-Br. 320 bis (N.c.).
- (9) La. 434-Br. 223 (18°), La. 208-Br. 320 bis (N.c.).
- (10) La. 451-Br. 228 (18°), La. 12-Br. 195 (N.c.).
- (11) La. 481-Br. 674 (19°), La. 530-Br. 673 (N.c.).
- (12) [La. 489-Br. 758 (19°), La. 506-Br. 687 (19°)], La. 515-Br. 688 (N.c.).
- (13) La. 543-Br. 605 (21°), La. 379-Br. 604 (N.c.).
- (14) La. 626-Br. 706 (24°), La. 640-Br. 707 (N.c.).
- (15) La. 631-Br. 720 (24°), La. 651-Br. 721 (N.c.).
- (16) La. 682-Br. 747 ter (26°), La. 351-Br. 262 (N.c.).

計 (14組31個)*

*この合計数は、表 I 中に所載のもの (5, 12中のカギ形括弧内の fr.) を省いた数字である。

表 III

《Non classé のみに属するもの》

- (1) La. 40-Br. 94, La. 303-Br. 74 bis.
- (2) La. 162-Br. 94, La. 165-Br. 94 bis.
- (3) La. 233-Br. 346, La. 232-Br. 365.

- (4) La. 250-Br. 588 bis, La. 469-Br. 588.
- (5) La. 319-Br. 559, La. 453-Br. 559 bis.
- (6) La. 343-Br. 233, La. 344-Br. 382, La. 348-Br. 232.
- (7) La. 549-Br. 630, La. 557-Br. 630.
- (8) La. 655-Br. 760, La. 663-Br. 761.
- (9) La. 696-Br. 458, La. 721-Br. 460.
- (10) La. 707-Br. 382. La. 706-Br. 383.

計 (10組21個)

表 IV

(A) Classé 所属の類似断章数

- 1. 同一章中のもの (8 × 2)16
- 2. 異った章中のもの (10 × 2)20
- 3. Classé と N.c. に属するもの14
(N.c. に類似する Classé)

計 (50個)

(B) Non classé 所属の類似断章数

- 1. Classé と N.c. に属するもの17
(Classé に類似する N.c.)
- 2. N.c. のみに属するもの (10 × 2 + 1)21

計 (38個)

総計 (A + B = 88個)

表IIにより、類似の諸断章が、Classé および Non classé に所属する場合は、14組31個に達する。そして Non classé のみに所属する類似断章数は、表IIIにより、10組21個存することが、分る。

表IVにより、Classé 中における類似の断章数が、Classé の総数中において占める割合は、 $50/388\% = 13\%$ である（分母の数字については、XVI回の表II参照）。次に Non classé に属する類似の諸断章が、Non classé の総数中で占める割合は、 $38/348\% = 11\%$ （分母の数字については、同上）である。したがって、Classé および Non classé の全執筆時期におけるパーセンテージの変化は、 $13 - 11\% = 2\%$ 減となって現われている。このパーセンテージの減少は、なににに因り、なにを意味しているであろうか。

以上のごときパーセンテージの減少は、Classé 全体が《アポロジ》の下書にあっても、第一段階のものであり、叙述の形式・順序および参照事項を直接指示する語句の存在する個処の数量が、第二段階（Non classé の時期）の場合よりも多いことに相応しく、⁽²⁾ 構想の素材の配置・展開、要するにプランの基礎的構築に配慮の重点が置かれたこと、他方執筆の第二段階（後期）における Non classé の断章群は、プラン全体の緻密化に伴う完成度の高度化の所産であること、以上二つの理由によるものと、おもわれる。

われわれは、既に拙論第1回およびXVI回において、Classé（既分類断章群）が非重要断章群であり、そうして Non classé（未分類断章群）が重要断章群であることを、見て来た。われわれは、この際重要断章群の『重要』といふ意味を、上り具体的に規定する要がある。Classé そのものにおける《第1部》・《第2部》の別にあつては、《第2部》が重要断章群であり、《第1部》が非重要のそれであつた。この場合、重要・非重要な区別は、叙述内容そのものの重要・非重要を反映するものである。しかし、Classé と Non classé を比較した場合は、必ずしもそうではない。内容上重要な断章はむしろ、Classé 中に多いとさえ言いうる。⁽³⁾ それにもかかわらず、Non classé の方が重要断章群なる結果が出たのは、多くの場合これに属する諸断章が、その叙述内容およびその表現において、完成度が高いという点に存する。すなわち、大部分 Non classé はパスカルにとって、著作の本格的執筆に際し、直ちに利用しうる状態にあつたのであり、またこの目的に沿うよう、彼は諸断章（Non classé）を執筆したのである。このことは、パスカルの『パンセ』を仔細に検討するならば、否定しえない事実である。言い換えれば、Non classé は Classé の補足展

開としての詳細化、具体化の場合が、多ということである。

扱て拙論 I 回において述べられたごとく、Classé・Non classé の重要・非重要な判定の規準となったものは、タイトル・小見出しの数量、詳しくはこれらが Classé, Non classé のそれぞれの総数中において占めるパーセンテージであった。そうしてこれらのタイトル・小見出しなるものは、諸断章の分類を円滑ならしめるためであった。したがって、Non classé のタイトル・小見出しの数量がパーセンテージにおいて少いとすることは、反面において、かかるタイトル・小見出しを必要としない程、分類容易な、したがって直ぐさま分類可能な諸断章が多いということであり、これは Non classé 所属の諸断章の完成度の高いという事実と、見合う事柄である。なぜなら、完成度の高い断章は、これらが所属すべき《章》全体の主旨はもちろん、同章中の他の諸断章との連関も、パスカルの脳裏に刻みつけられていたものと、推測しうるからである。

ところで、前述の類似断章のパーセンテージの2%減の現象もまた、以上の事実と符合するものである。断章群の完成度が高いということは、Non classé が下書として、決定稿ないしこれに近いものであることを、意味する。したがって、表現に対する読者の関心を配慮するということが、パスカルにとって当然重要事であったと、見られる。それゆえまた、類似表現の反復・非反復にかんして、読者の関心を念頭に置いた美学的計算の結果が、叙上の2%減の現象に成ったものと、解しうるのである。かくして Non classé が重要断章群である事実、ならびに Non classé の完成度が Classé に比して高いということ、および Non classé 中の類似断章のパーセンテージの減少という三個の事実は、内的に相互に連関しあっているのである。否むしろ、これら三つの事態は、同一事実を示すものに外ならないのである。

III 同一章中に配置さるべき類似断章 (Non classé 所属) の数量について

扱て Non classé 中の類似の諸断章の総数38個という数字(表IV, B)は、同一章中に所属すべきものと、異った章中に配置とれるべきものとの両者を、含ん

だ数字である。この数字のうち、何個が同一章中に配置さるべき断章であったか。この断章数の推定の手掛りとなるものは、2%減少の事実である。すなわちであろうち、同一ないし類似の表現の反復は、読者の興味を書い易いということ、こうした事が——後期においては——特に配慮された事実を、われわれは重視する要が存するのである。ところで Non classé 中の類似断章のうち、同一章中に配属せしめるべきものと、異った章中に配分すべきものとの何れが、読者に対して反復の無味をもたらし易いであろうか。それは言うまでも無く、前者であろう。異った章中に配置される場合、類似の各断章は、異ったおのおのの《章》のテーマないし文脈によって、多少ともその意味合いに変化を生じ、読者の関心を惹きこそすれ、反復による無味乾燥をもたらすことは、同一章中に配置された場合に比して、少いものと判定しうるであろう。Classé 所属の類似断章群のうちで、異った章中に配置された fr. が、同一章中に配された fr. より4個多いという前掲の事実も、これを裏書きするものである。それゆえ、Non classé の時期に執筆された類似の諸断章に見られる前述の2%減の現象は、主として同一章中に配さるべき類似断章の減少に帰因するものと、推定される。したがってわれわれは、われわれ自身の Non classé の Classé への分類配分に際しては、2%減の数字に基づいて、分類作業を行ったのである。

扱て Classé 中の類似断章の総数において占める、同一章中に配置せられた類似断章数の割合は、 $(16+6)/50\%=22/50\%=44\%$ (概数) である (表 I 参照)。この最初の式の左辺におけるなる6数字は、表IVのAの3の《Classé と Non classé に属するもの》(14個) を、規準とするものである——この数字は、同一章中のものと異った章中のものとを含むが、前者は後者より少数のはずである、すなわち14個の半数 (14/2) 以下の筈である。したがって、Classé と Non classé に所属する類似断章群のうち、同一章中に属すべきものの数は、最大限6個であって、これ以上ではありえない。

ところで、Non classé 中の類似断章全体 (38個) において占める、同一章中に配属さるべき類似断章数 (N.c.) の割合は、次の如くでなければならない—— $44-2\%=42\%$ 。それゆえ、 $38\times 42/100$ 個=16個 (概数) が、Non classé に所属しかつ同一章中に配置さるべき類似断章の総数である。これは、類似断

章2～3個を1組と考えれば、 $16/2 \sim 3$ 組 = 5～8組に相当する。したがって、Non classé に所属しかつ異った章中に配分さるべき類似断章の総数は、 $38 - 16$ 個 = 22個 (7～11組) (概数) である。かくてわれわれ自身による Non classé の分類作業 (XIV・XV回) も、以上の数字を考慮した上で行われたことを、茲で再言しておき度い。

註

- (1) Oeuvres complètes de Pascal, Présentation et notes de Lafuma, Paris, Ed. du Seuil, 1963, p. 357.
- (2) Classé 中における叙述形式・順序・参照事項を、直接指示する語句の存在個所の数量は、66個所に達する——La. 27-Br. 184, La. 28-Br. 247, La. 29-Br. 60, La. 30-Br. 248, La. 32-Br. 291, La. 34-Br. 246, La. 35-Br. 187, La. 38-Br. 290*, La. 82-Br. 83, La. 234-Br. 423, La. 309-Br. 430, La. 340-Br. 218, La. 363-Br. 747, La. 430-Br. 570, La. 459-Br. 289*, La. 682-Ar. ter. (*印の附いた断章は、拙論 (V回のVII) により、Classé の時期に書かれたものと、推定されるものである) これに反して、Non classé 中における以上のごとき語句の存在する個所の数量は、僅か2個 (La. 40-Br. 74, La. 42-Br. 449) にすぎない。
- (3) このことは、Classé および Non classé のそれぞれの全体が、一方を残して完全消滅した場合を想像すれば、明らかである。たとえ Non classé が消失したとしても、Classé が残存するならば、パスカルの《アポロジ》のプランなるものは、不十分乍らこれを覗いうるのである。これに反し、Classé が消失したとするなら、Non classé のみが残存しても、《アポロジ》のプランは、これを知ることは、前者の場合に比して、極めて困難であり、殆んど不可能に近いであろう。
- (4) Classé に対する Non classé の補足性については、拙論VII回のIIIを参照のこと。
(註了)

<附記>——われわれは、Classé と Non classé の両時期を区別して、「後者の時期に、Non classé の諸断章が執筆された」ものと述べたが、実際は未分類の断章であって、Classé の時期に書かれたものがあることは、事実である。しかしわれわれの言わんとするところは、厳密な意味における「断章執筆の時期」そのものではなく、未分類断章群全体にかんする作業が、Classé の時期に遅れるという点で、——すなわち、執筆・分類予定・プランの充実という総合的見地において——「後期」と規定したのである。